巻　頭　言

ジェネラリストの時代から スペシャリストの時代へ

宮　川　豊　章*

これからはジェネラリストの時代ではなくスペシャリストの時代になるといわれている。ある特定の分野ならいつでもどこでも通用するスペシャリストが必要とされている。ジェネラリストはスペシャリストのなかから育つものであって，最初から目指すべきものではない。底の浅いジェネラリストほど始末に負えないものはない。スペシャリストとして整理された経験は尊重しなければならないが，いわゆるジェネラリストの科学的に整理されていない経験はきわめて迷惑なことが多いのはよく知られるところであろう。

スペシャリストの白眉であるプレストレスト・コンクリート技術者がすばらしいものであることはいうまでもない。わが国を支えるインフラの質および量を着実に充実させてきた。技術者達はインフラを造りこなすことに誇りをもち，毎日汗を流してきたのである。しかし，技術者に要求されるものは日々変わってゆく。現在は，造りこなすことは当然ながら使いこなすことも要求される時代となった。

犬は鼻が利き，犯罪捜査にも良く用いられている。しかしトリュフを探す場合には豚が用いられると聞く。何かを探る場合には一つの手法しかないのは良くないのである。目が二つあって始めて立体視が可能となり，対象を正確に把握できるように，手法は複数あることが望ましい。コンクリート構造物にも同様に，造りこなすばかりではなく，使いこなす技術が要求される。使いこなすことにも誇りをもつことこそがこれからの時代である。

その昔，わが国日本は捕鯨大国で，小学生の頃には学年誌などで日本の捕鯨の誇らしい文章を読むことが多かった。その当時一世を風靡した技術に平頭銛がある。銛の先端が鋭く尖っていると水面ではね，鯨の皮膚ではねる。界面で特異な応答を示すのである。したがって先端は尖っていてはならない。単に尖った技術は種々の界面で誤差を生じ，大きなリスクを負いがちである。界面で妙な挙動を示す可能性の少ない太く強い技術こそが市民社会にはふさわしい。もちろん，銛を使いこなす周辺力を備えて始めて平頭銛は有効となる。言い換えれば，技術はそれを支える基盤技術によって支えられるのである。もっとも，平頭銛の技術は，鯨に対する世の見方とともにその存在価値を変えていった。

しかし，同じく太く強い技術であるプレストレスト・コンクリート技術は違う。マスコミの人と話していると彼らはいう，「なぜコンクリート技術者はそんなに自虐的なのですか？」と。マスコミおよび一般市民はコンクリートその粋であるプレストレスト・コンクリート技術を高く評価していますよ，というのである。存在価値は広く認められている。われわれはもっと自信をもって良いのである。自信をもって後輩に対することが，後輩が育つ唯一の方法だろう。怖じけた愚痴っぽい先輩に有意の後輩がついていくはずがない。

プラトンのひらいたアカデメイアという名の学校の後継者はアリストテレスではなかった。それは当然だったろう，と私は思う。優秀な後輩には同じことをやって盲従して欲しくない。妙な枷を負わせたくはない。同じことでも違う切り口，先輩ができなかったことをやってさらに高く羽ばたいて欲しい。そのように後輩に対するべきだろうと思っている。

プレストレスト・コンクリートの計画・設計・施工・維持管理に関わるすべてに通用するスペシャリストである技術者の養成が望まれている。これら4者は連携しており，たとえば設計の仕事は物ができていく道筋をはっきり見えるようにすることだといわれる。また，施工・維持管理しにくいような計画・設計は論外であろう。そのようなシナリオ空間のなかにわれわれの後継者が羽ばたける準備をわれわれがするべきであると思っている。

* *Toyoaki MIYAGAWA*：本工学会顧問
京都大学 学際融合教育研究推進センター インフラシステムマネジメント研究拠点ユニット 特任教授